

アメリカ文学と山紀行

Ian Marshall: *Story Line: Exploring the Literature of the Appalachian Trail*

星野 勝利

アメリカ合衆国の東部を大きな山脈が走っている。全長約 2600km, 幅約 100km の Appalachian Mountains である。20 世紀のはじめ、アメリカ東部の山好きの男たちの間で、この山脈を一本の道でつなぐ話が話題になり始める。バーモント州の Green Mountains の山の中で、木の頂からはるか遠くを見やった Benton Mackey が、山並みを貫く一本の道を思い浮かべたのがその発端である。その後いくつかの変遷の後、ついにこの話が現実のものとなる。1958 年、ジョージア州の Springer Mountain からメイン州の Mt. Katadhin まで、延々と続く一本のハイキングコースが完成する。Appalachian Trail である。

アメリカに移住したヨーロッパの人たちは、大陸東側にあるこの山脈と、開拓時代以来、いろいろな形で関わってきた。人跡未踏の山もあれば、インディアンに住む山もあったが、この山塊は西へ向かうためには必ず越えなければならない世界であった。同時に、林産物や鉱産物、水資源や景勝の地を、豊かに提供してくれる場でもあった。文学の世界もまた、この豊かな世界と多様な関わりを持つ。

山々を結ぶこの一本の道を、著者はこよなく愛する。時には一人で、時には友とともに、折りに触れ、山に入り、道を歩く。眺めを楽しみ、季節の変化を楽しみ、人々との出会いを楽しむ。ただし、山に向かうのは、このためだけではない。山を歩くことは、著者にとっては、一種の読書行為である。「読書」(reading)と「山歩き」(backpacking)との間には、次のような共通性がある。

Both progress linearly, both require patience as you follow along. Sometimes what you encounter seems like something you've seen before, but you know there could always be some surprise right around the next turn.

山を楽しみ、書物を楽しむ著者は、実はエコロジーと文学との関係に関心を持つ学究である。トレッキングを楽しみながら、著者の関心はつねに自然と環境、そして自然と文学との関係に向かう。このことをたえず思いめぐらす著者は、山行きに際して、一つのことを怠らない。訪れる山に関わるテキストを十分に読み

込み、関連する文献にも目を通し、その上で山に入る。これが著者の山歩きの型である。

このような山歩きは、むしろ研究行為というべきかもしれない。アカデミックな一種のフィールドワークである。このフィールドワークを、本書は13章にわたって紹介する。対象となるフィールドが巨大な長さと広がりを持つものである以上、訪れる山々の数も必然的に増える。南の方の Great Smoky Mountains の山々や、北の方の Green Mountains の山々をはじめとして、一本の道が結ぶ無数の山々が著者の踏査の対象である。

山々の多様さは、テキストの多様さである。著者がひもとく書物の数は、下記のように多岐にわたる。アメリカ文学の歴史を、過去から現在にわたり、ほぼ網羅するといってもよい。一本の道にかこつけて、著者はこれを「物語の道」(Story Line)と呼ぶ。

- James Mooney, *Myth of the Cherokee* (1900)
- William Bartram, *Travels* (1791)
- Mary Noailles Marfree, *Prophet of the Great Smoky Mountains* (1885)
- Horace Kephart, *Our Southern Highlanders* (1913)
- Annie Dillard, *Pilgrim at Tinker Creek* (1974)
- John Fountain, *Journal* (1710-19, published 1972)
- George Seagood, "Expeditio Ultramontana" (1729)
- William Caruthers, *Knights of the Golden Horseshoe* (1841)
- Thomas Jefferson, *Notes on the State of Virginia* (1785)
- Charles Brockden Brown, *Edgar Huntly* (1799)
- Walt Whitman, "Song of the Open Road"(1860)
- Allen Ginsberg, *Howl* (1955)
- Herman Melville, *Moby Dick* (1851), "The Piazza"
- Robert Frost, *New Hampshire*(1923)
- Nathaniel Hawthorne, "The Ambitious Guest"(1835), "The Great Carbuncle"(1836),
"The Great Stone Face"(1850)
- Henry David Thoreau, *The Maine Woods* (1864)

山道を歩く著者がその途上で何を思うか、その詳細については本書をひもといてもらいより仕方がない。しかし、そのいくつかを垣間みれば、およその輪郭が見えてくる。たとえば道の南端部、ジョージア州とノースカロライナ州が交わる

境界線付近には、Cherokee country と呼ばれる一帯がある。インディアンの Cherokee 族がかつて住んでいたところである。この地へ友と二人で向かう著者は、Mooney の本をバックに詰めこみ、山に入る。1 週間以上も山にこもりながら、その過程で著者はさまざまなことを考える。土地に対する Cherokee 族の思い、geopiety とよぶべきその視点、動物と一体化した視座、開拓時代以来の白人との交わり、結果としてのオクラホマ移住の悲しい歴史、その歴史を語る Trail of Tears のこと。山道を辿りながらこれらを思いをめぐらす著者にとって、山行きは、文学であると同時に、地誌学であり、歴史学であり、文化人類学である。

このような視点から、環境と人間との関係、自然と人間との関係を、著者は多角的に探っていく。Nantahala Mountains の山中では、原住民への配慮から植物採集を敢えて断念したと思われる大植物学者 Bartram の行為を追い、Great Smoky Mountains の山の中では、現在ではほとんど話題にされることのない女流作家 Murfree に目を向ける。著者から見れば、自然の中の女性、特に自然に対して優しい女性を描いたこの無名の作家は、ecofeminist としてそれなりの役割を与えられるべき存在である。一方、バージニア州西方の Tinker Creek では、自然の世界を静かに眺めた女性作家 Dillard の姿勢について考える。セミ時雨の中、陰陽道や超越主義などにも思いを馳せる著者は、Dillard のそれが、mind を無にして神に近づく *via negativa* とよぶべきものであることを確認する。

さらに北上する著者は、Blue Ridge の踏査の歴史を省みながら、Jefferson Rock の上に立つ。さらに、Edgar Huntly の舞台であるペンシルバニアの岬々たる岩山を過ぎ、ハドソン川を越えて、アメリカ文学ではなじみの世界であるニューイングランドへと向かう。マサチューセッツ西方の Mt. Greylock では、この山の麓で創作に従事した作家 Melville について考えながら、自分の立場が、自然を懐疑的に眺める Melville のそれよりも、むしろ Thoreau のそれに近いものであることを確認する。

I want to be Thoreauvian, a lover of nature, one who finds meaning, sense, value, in the natural world, one who is at ease with himself amid nature and who sees nature's purposes.

バーモントの Green Mountains では、詩人 Frost の詩の世界が検証の対象となる。Frost 詩の特徴とされる人間志向性 anthropocentrism は、著者の見るところ、必ずしも当てはまるものではない。部分で全体を語るようなその詩に見られるのは、むしろ nature との biocentric な共生感覚であり、この姿勢は、Hawthorne の短編に

も見られるものである。White Mountains を素材とするその短編が伝えるメッセージは、nature を最後に手に入れるのは、natural order をあるがままに受け入れる人であるというものである。最北端の山 Mount Katadhin では、かつて Thoreau が歩いた道を、著者はそのままなぞるように辿る。辿りながら思うのは、ecologist としての先駆者 Thoreau の偉大さである。その偉大さは“*He doesn't just observe nature. He ponders its meaning.*”という一点にある。

この特徴は、そのまま本書の特徴である。本書は、一本の道を取り巻く自然や書物を、単に観察しただけのものではない。それについて深く思いめぐらしたものである。とりわけ、ecocriticism という視点から、アメリカという一つの場における人間と環境との関係を探るものであり、関連文献にも十分目配りするものである。結果として、アカデミズムに走りすぎる部分がないわけではない。ただし著者は、subjective approach を採用し、できるだけ主観を表に出すことも忘れない。自然や書物と真にふれあうためには、一人称としてこれを体験することが避けられないからである。一人称による語りという本書の構造は、このことによる。

本書は新しい視点からのアメリカ文学研究書である。しかも、その可能性を示唆するものである。しかし本書は、文学と同時に、道中のさまざまな体験も語ってくれる。自然のもよう、出会う人々のこと、対話や触れあい、山道にゴミを捨てる若者のこと、ゼミで来た学生グループのこと、友のこと、家族のこと、配偶者のことなど、きわめて個人的なことも含めて、さまざまな体験が率直な口調で語られる。この意味で本書は、エッセイであり、紀行文である。これもまた、本書のもつ魅力である。

A hike along the Appalachian Trail is a walk into the heart of America.

著者によると、アパラチアン・トレイルを辿ることは、「アメリカの心」に歩み入ることである。その著者が、作中でしばしば異国日本への視線を垣間見せているのは楽しい。配偶者との出会いはオリガミが絡むものであったし、俳句のこと、禅のこと、道元のことなども、ときおりことばの端に現れる。そのうえ、Tinker Creek の山の中では、山々に間歇的に響くセミ時雨の中で、一人その声にじっと耳を澄ましている。さながら奥の細道を辿る芭蕉の風情である。アメリカの書物では、あまり見かけない光景である。

(University Press of Virginia, 1998, 284pp., \$19.55)